

老人と神とのかかわりについて

村 井 隆 重

一、老人と神とにかかわる資料

日本の老人史をさぐっていると、老人が深く神とかかわりあっている神話伝説にあたる。その第一は神が老人の姿をかりて現れるというものである。いま室町時代までの神話伝説を時代を追ってあげると次のとおりである。

(1) 海幸山幸。

……故、彦火々出見の尊憂苦へますこと甚深く、行きて海畔に吟ひたまひき。時に塩土の老翁に逢ふ。老翁問ひて曰はく、「何とかもここに在しまして愁へたまふ」といへば、対ふるに事の本来を以ちてしたまひき。老翁の曰はく、「またな憂苦へましそ。吾汝の為に計らむ」といひて、日無し簞を作りて、彦火々出見の尊を簞の中に内れ海に沈む。……（日本書紀巻の第二）

(2) 牛窓

神功皇后の舟、備前の海上を過ぎたまひき。時に大きな牛有り、出でて舟を覆さむとしき。住吉の明神、老翁に化りて、其の角を以ちて投げ倒したまひき。故、其の処を名づけて牛窓と曰ひき。今牛窓と云ふは訛れるなり。（風土記逸文、備前国）

(3) 興福寺南円堂

（興福寺南円堂の）堂之壇つきけるが、いたうくずれけるに、翁のいできて、此歌をうたひてつかばよもくづれじとて、うたひだしたりける

ふたらくの 南の岸にたうたてて

今ぞさかへん 北の藤浪

其翁は春日の明神とぞ申つたへたる。其後北家はながくさかゆなり。(大鏡裏書)

(4) 醍醐寺由来

爰ニ普明寺ニ於テ七ケ日間仏法相応之靈地ヲ祈念ス。彼ノ祈願ニ酬ヒ五色之雲当山ノ峯ニ聳ニ。玆ニヨリテ此峯ヲ攀昇シ欣然トシテ故郷ニ帰ルガ如シ。嘿爾トシテ精舎ヲ建テント欲ス。而シテ谷ニ独リノ老翁アリ。泉水ヲ嘗メ醍醐味ヲ褒ム。ココニ尊師(開山の理源大師)老翁ニ問ヒテ曰ク、「此処ニ精舎ヲ建テ將ニ仏法ヲ弘メント欲ス。永ク久住スベキヤ」ト。老翁答ヘテ曰ク「此山ハ是古仏練行之洞、諸天衛護之砌、前仏之遊処、名神ノ居ル所ナリ。如意宝生之嶺、功德衆集之林、法灯続キテ竜花開クニ及ビ、僧侶絶エズ雞足之朝ニ至ラン。我ハ此処ノ地主也(横尾明神是也)永ク和尚ニ獻ズ。スナワチ仏法ヲ弘メ広ク群類ヲ救エ。我俱ニ護衛セン云々」。(其後失シテ見エズ)(醍醐寺縁起)

(5) 業平住吉詣

むかし、みかど、住吉に行幸したまひけり。

我見ても 久しくなりぬ 住吉の

岸の姫松 いくよへぬらむ

おほん神、現形し給ひて、

むつましと 君は白波 瑞垣の

久しき世より いはひそめてき

この事を聞きて、在原の業平、住吉にまうでたりけるついでに、よみたりける。

住吉の 岸の姫松 ひとならば

幾代かへしと 問はましものを

とよめりけるに、翁のなりあしきいでゐて、めでて返し、

衣だに 二つありせば あかはだの

山に一つは かさましものを

とよみて消え失せにけり。後に思へば、御神なむおはしましける。(伊勢物語)

(6) 天王寺の僧道公法華を誦して道祖を救ふものがたり

(天王寺の僧道公が熊野からのかえり大きな木の下で野宿をした。夜中に二三十騎の人が来て、「木のもとの翁はいるか」と問ふと「翁候ふ」という返事があった。馬上の人が早く出て来いという。「今夜は駒の足が折れて乗れないので御供出来ない。明日他の駒を求めておきます。年老いて歩いては行けません」と返事があった。翌朝道公が怪んで木の下をみると道祖神と足の所の破れた絵馬があった。道公は絵馬のつくりひをして今夜また様子をみようと思つた。夜中に前夜のように騎馬集団がやって来て道祖神も一諸について行った。曉になるほどに、道祖かへり来ぬと聞くほどに、年老ひたる翁来れり。誰人と知らず。道公に向かひて拝していはく、「聖人の昨日駒の足を療治したまへるによりて、翁この公事を勤めつ。この恩報じ難し。われはこれこの樹のもとの道祖これなり。この多くの馬に乗れる人は行役神におはします。国のうちを廻る時に、必ず翁をもつて前役とす。もしそれに供奉せねば、咎をもつて打ち言をもつて罵る。この苦しみ實に堪へがたし。されば今この下劣の神形を棄てて、速かに上品の功德の身を得むと思ふ。それ聖人の御力によるべし。」と。道玄答へていはく、「のたまふところ妙なりといへども、これわが力に及ばず。」と。道祖またいはく、「聖人この椎の下に三日留まりて法華經を誦したまわむを聞かば、われ法華の力によりて、忽ちに苦しみの身を棄てて樂しみのところに生れむ」といひてかき消つやうに失せぬ。

(道玄が頼まれた通りにしてやると四日目にまた翁が現れ、菩薩の位に昇れたとお礼をいって消えた) (今昔物語卷十三)

(7) 慈覚大師如法經を書きける時住吉神託宣の事

慈覚大師如法經かきたまひける時、白髪のお翁杖にたづさはりて、山によちのぼりけるが、「あなくるし。内裏の守護といひ、此如法經の守護といひ、年はたかく成てくるしう候ぞ」との給けり。「たが御渡候ぞ」とたづね申されければ、「住吉の神也」とぞ名乗給ける。皇威も法威もめでたかりけるかな。(古今著聞集神祇第二)

(8) 智証大師ノ帰朝ヲ新羅明神擁護シ、園城寺創建ノ事

智証大師ノ御記文ニ云ク、予山王ノ御語ニ依リテ、大唐国ニ渡リ、仏法ヲ受持シ本朝ニ還ル。海中、老翁子ガ船ニ現レテ稱ク、「我ハ新羅ノ国ノ明神也。和尚仏法ヲ受持シ、慈尊出世ニ至ルマデ護持センガ為ニ来向ス」テヘリ。是ノ如ク言説之後、其形既ニ隠ル。予着岸シテ公家ニ申ス。即チ官使ヲ遣シテ、所持ノ仏像・法門太政官ニ運ビ納メラル。時ニ海中ノ老翁モ亦来リテ云ク、「此日本国ニ一ノ勝地在リ。我先ニ彼ノ地ニ到リテ早く以テ点定セン。公家ニ申シテ一加藍ヲ建立シ仏像法門ヲ安置シテ仏法ヲ興隆セヨ。我護法神トナリテ鎮ニ加持セン。……(古今著聞集釈教第二)

(9) 道因法師住吉社にて歌会ノ事

嘉應二年十月九日、道因法師人々をすゝめて、住吉社にて歌合しけるに、後徳大寺左大臣、前大納言にておはしけるが、此歌をよみたまふとて、社頭月といふことを、

ふりにける 松ものいはゞ 問てまし

むかしもかくや 住江の月

かくなむよみ給けるを、判者俊成卿ことに感じけり。よの人々もほめのゝしりける程に、其此彼の家領筑紫瀬高庄の年貢つみたりける船、摂津國をいらんとしける時、悪風にあひて、すでに入海せんとしけるとき、いづくよりかきたりけん、翁一人いできて、こぎなをして別事なかりけり。船人あやしみ思ふ程に、翁のいひけるは、「松ものいはば、の御句のおもしろう候て、此邊にすみ侍る翁のまいりつると申せ」といひてうせにけり。住吉大明神の彼歌を感じさせたまひて、御體をあらはしたまひけるにや。ふしぎにあらたなる事かな。(古今著聞集和歌第六)

(10) 高野山由来

空海和尚行年卅四平城天皇御宇大同二年丁亥八月帰朝の船を泛ぶる日発願祈誓して曰く、諸學教法秘密道場感應の地あらは此三鈷到點せよとて日本に向て抛上げ給ふに遙に雲中に飛入て東を差て去にけり。和尚行年三十三嵯峨天皇弘仁七年丙申高野山に登り給ふ。道にあやしき老人あり和尚に語つて云く、我は是丹生明神此山の山神なり。恒に業垢を厭ひ久しく得道を願ふ。今方に菩薩到来し給へり。妾か幸なりと云ひて山の中心に登り御宿所を示して焚を掃ふ所に海上にして抛る處の三鈷光を放て爰に在り。秘法興隆の地と云ふ事明なり。……(源平盛衰記)

(11) 住吉明神後白河院に伺候の事

今年は櫻は遅くつぼみて桃花はさきに開けたりけれ共智者は秋の鹿とのみ詠ぜさせ給ひて花を御覧する事も無かりき、之に依て雲の上人更に一人も花を詠しぬる人は御座さざりけるに三月三日たりし

春來遍是桃花水 不辨仙源何處尋

と高聲に詠ずる人あり。法皇誰ぞやと聞し食されし程にやがて清涼殿に参つて笛を吹鳴して時の調子黄鐘調に音取すましたり。さるかと思れば又御厨子の上なる千金と云ふ琵琶を懷き下し奉りて赤白桃李花を三返計ぞ引いたりける。直人とは覚えす希代の不思議哉とそ法皇は思し召さりける。赤白桃李花を三返弾きて後は琵琶を引かず詩歌をも詠ぜず笛をも吹かず、良久しく音せざりければ此者は帰りぬるやらんと

思召して、やゝ赤白桃李花をば何者か弾きつるぞと仰せありければ御宿直の番衆とぞ答へ奏しける。番衆とは誰ぞやと御尋あれば開発住大夫住吉とぞ名乗り給ひける。さては住吉大明神にこそと思し食して急ぎ御対面あり。夢にも非ず現とも思し召さず希代の不思議かなとぞ思し召されける。さて種々の御物語有りける中に大明神仰せられけるは、今夜は当番衆松尾大明神にて候へ共急ぎ申すべき事候て引替へて参りて候。昨日の暁山王七社と伝教大師と翁が宿所に来臨し給ひて、日本国の吉凶の評定候ひしに今度山門の大衆等邪風殊に甚しく宸襟を悩まし奉る条存じの外の次第にて候。但しむつ心にては候はざりつるなり。日本国の天魔集りて山の大衆に入り替って君の御灌頂を打止めまひらせ候処也。されば衆徒の咎には非ず併しながら天魔の所為にこそ。……(源平盛衰記)

(12) 大物浦の難

(義経都から西国に走らうとして嵐に会い大物浦に打寄せられる。義経の命をうけ片岡八郎上陸する)。苦屋の前を打過ぎ、一町ばかり上りて見れば、大きな鳥居あり。鳥居に付きて行きて見れば、古りたる神を斉ひ参らせたる所なり。片岡近付て拝み奉れば齢八旬に長けたる老人、只一人佇みにけり。「これはどの国の何処のところぞ」と問ひければ、「此処に迷ふは常の事、国に迷ふこそ怪しけれ。さらぬだに此ところは二三日騒動する事の有るに、判官の、昨日是を出て、四国へとて下り給ひしが、夜の間に風変りたり。此浦にぞ著き給ふらんとて、当国の住人手嶋の藏人、上野判官、小溝太郎承て、陸に五百疋の名馬に鞍皆具置きて、磯には三十艘の杉舟に搔櫓をかき、判官を待ち懸けたるぞ。若しその方様の人ならば、急ぎ一先づ落ちて遁れ給へと仰せられければ、片岡さらぬ体にて申しけるは、「これは淡路国の者にて候が、一昨日の釣に罷出で、大風に放されて、只今これに著きて候なり。ありの儘に知らせ給へ」と申しければ、古歌をぞ詠じ給ひける。

漁火の 昔の光 仄見えて

蘆屋の里に 飛ぶ蜚かな

と詠じて搔消す様に失せにけり。後に聞きければ、住吉の明神を斉ひ奉りたるところなり。憐みを垂れ給ひけるとぞ覚えける。(義経記)

(13) 尊氏香椎宮参詣

建武三年三月二日辰刻に宗像の御陣を御立て御向ひ有。五六里計御過有ける末の刻計に香椎宮の御宝前を過させ給ふ所に、神人等杉の枝を折持て申けるは、敵は皆笹の葉を笠印に付て候。是は御方の御笠印なるべしとて、両大将より始奉て軍勢の笠印にぞ付させける。奇瑞誠に目出たくぞみえし。殊当社は新羅征伐の昔、神功皇后椎木に御手をふれられけるに依て、香ばしかりしゆへ香椎宮と申也。此ゆへに当社

椎木を以神舩に比し、杉の木を以御宝とせり。然るに淨衣着たりし老翁直に將軍の御鎧の袖に杉の葉を指奉りければ、白き御刀をぞ給ける。後に御尋有しに、神人等更にしらざるよし申ければ、是は神の御加護化人を遣されけるかと弥頼母敷思召ければ、軍勢ども勇の色をぞ顯しける。(梅松論)

まず以上の二三例をあげることが出来る。(1)は有名な海幸山幸の神話で日本書紀本文によった。日本書紀は本文各一書とも塩土の老翁となっているが古事記のみは塩椎の神となっている。(3)は興福寺鑑觸記にも同様の記載があるがただ老翁は二人で率河大明神および榎本明神となっている。なお南円堂建立は嵯峨天皇の弘仁四年(紀元八一三年)藤原冬嗣によるものである。(4)の醍醐寺建立は貞観十六年(八七四年)である。(5)の業平の歿年は八八〇年である。(6)の出典である今昔物語は一〇五〇年より以前に出来たと推定されている。

(7)(8)はその出典である古今著聞集が鎌倉時代であるためここに位置づけたが(7)の慈覚大師が如法経を書いたのは天長年間(八二四―八三四年)である。(8)の話はなお続いて結局三井寺の再建に落つくが智証大師による三井寺再建は天安二年(八五八年)のことである。(9)になると時代ははるかに下って平安末期の一七〇年にあたる。(10)は物語の色づけとして書かれたもので本地垂迹思想にもとづく挿話というべきであろう。やや伝説としてはあやしいものである。(11)の法皇は後白河法皇である。(11)(12)とも(10)以上に物語的なものとなっている。

上記の例は一応神話伝説といえるものをあげたのであるが室町時代に入るとお伽草紙を中心として多くの小説が出てくるのであるがその中から主だったものの題名、モチーフ、出現する神をあげると次のとおりである。

- (14) 八幡宮縁起 神功皇后新羅征討 住吉明神
- (15) すみよしえんぎ 海幸山幸 しおつつの神、景行天皇の西征―すわ明神、かしま大明神、すみよし明神、白居易東征―すみよし明神
- (16) 彦火々出見尊絵 海幸山幸 しほつつの翁
- (17) かみよ物語 海幸山幸 しほつつの翁
- (18) 武家はんしやう 海幸山幸 しほつつの翁
- (19) 伊吹山酒釀童子 頼光による退治 八幡、住吉、熊野三神
- (20) 酒呑童子 右におなじ
- (21) 美人くらべ 姫君さがし 住吉明神

神仏習合はすでに奈良時代に始つたので、神が老人の姿になって現れるなら当然ながら仏が現れることにもなる。ここにはその主題と出

典のみをあげておく。

(22) 推古天皇の時僧行善観音を念じて危機を免れる。(日本霊異記)

(23) 奈良時代蟹蝦いかまの命をあがない放生してやった娘大蛇の妻となることを免れる。(日本霊異記)

(24) 貧しい娘清水観音に仕へ豊かになる。(今昔物語十六)

(25) 東大寺開眼供養の読師を鯖売りの翁行う。(今昔物語卷十二外)

さらに神仏が直接出現せず主人公の夢の中に老人となって現れる話が平安時代になってから相当数あげられる。(敵密にいうと(25)の話の発端は聖武天皇のみられた夢にある)

また室町時代に大成した能(謡曲)にはしばしば前ジテが老人でそれが後ジテで神霊として現われるものがある。前者(神仏夢現)は神仏出現に一屈折をおいたものと思われるし、後者(能)については多くの研究が行われているのでここでは取り上げず、(1)~(13)の話を中心に以下考えてみることにする。

二、神とかかわる老人についての解釈

さて神が老人の姿になって現れるという神話伝説の起源をさぐることにしたい。神話に残された民族の文化はそのまま伝説の世界にも引継がれてゆくものと考えてよいであろう。そこでまず神話について吟味してみよう。さいわいにして(1)の海幸山幸は「失われた釣針」(英雄が釣針を失ってしまふ。その釣針を捜しに行つて、海の下の人間のあごのなかに釣針をみつけ出し、海中の少女と結婚するという筋)として有名であり、大林太良によると「レオ・フロベニウスが示したように太平洋をめぐる地域に広く分布している。そのなかでもミクロネシアのパラオ島、インドネシアのケイ島、セレベス島のミナハッサに伝えられたものがよく似ており」^(注一)また海宮に遊行する話はカンボチャ、中国の東南部、南部沿海、楊子江下流、さらに朝鮮にも見られる。^(注二)しかしいずれの話をもても海中に行く媒介者としての老人はいない。

最近の神話学による日本神話の起源についての結果をまとめると、天地開闢からアマテラス神話までの一群は弥生式時代に入る頃中国の江南地方から、出雲神話はおなじく中国江南地方からことによると朝鮮を経由して古墳時代に、日向神話は東南アジアことにインドネシアから多分弥生式時代に九州南部に、そして天孫降臨神話は恐らく皇室の祖先によって朝鮮から古墳時代にわが国に入ったということになる。^(注三)即ち天地開闢等神話および出雲神話で中国中南部、東南アジアおよびポリネシア神話が、日向神話によって東南アジアおよびインド

ネシア神話が、天孫降臨によって朝鮮蒙古を中心とするアルタイ系遊牧民神話が入ったことになる。このことはとくにアルタイ系神話の入っていることによりほぼ全世界の神話が何らかの形でわが国の神話に形響していることを意味するであろう。

ところで先に「失われた釣針」については類似の他民族の神話に老人が出て来ることはなかったといったが、そもそも神が老人の姿になって現れるという神話が外にあるのだろうか。私のしらべた範囲^(註四)でそれらしいものとしては神話としてはなく伝説民話としての次の四である。

(一) 新羅善徳が皇竜寺に九重塔を建てるにあたり、はじめて柱をたてる日俄に地面がゆれあたりが暗くなった。その時一人の老僧と一人の壮士が金堂の門から出て来て柱をたてた後消えた。(三国遺事)

(二) 高僧の縁会は国王から召されるのを嫌がり逃げ廻っていたが、それを翁と姫が出て来て国王の所へ行くよう忠告した。後で翁は文殊大聖、姫は弁才天女とわかる。(三国遺事)

(三) 高麗の太祖王建の祖父作帝建が若くして唐土に赴く途中濃霧におそれ同船の卜者の言によりやむなく海中の岩にとどまった。そこに老翁が現れ自分は西海の竜王であるといつて自分を悩す老狐の退治を依頼した。作帝建が退治してやると竜王は喜んで彼を王宮に入れ長女を妻として与えた。(高麗史)

(四) 姉妹が山羊をさがして森の中へ行き、弁当を開いているとボロボロの着物を着た老婆が出て来て弁当を分けてくれと頼んだ。姉妹がやさしく分けてやった。すると老婆は突然若い女にかわり自分は森の女神だが親切にしてくれた御礼に頼みごとを聞きとどけるといった。妹娘はアバム菓子のおいしい作り方を習った。それ以来彼女の住んでいたバラバイのアバム菓子はおいしいという。(インドネシア民話)

以上の四のうち(一)は紀元六四三年、(二)および(三)は七九〇年頃の話であり、日本神話のもとである古事記(七二二年成立)日本書紀(七二〇年成立)に影響を及ぼしたとすると(一)であるが話の筋からして今昔物語巻十一にある「推古天皇もとの元興寺を造るものがたり」と密接な関係があるとは推測されるが記紀神話との関係はなさそうである。(四)は民話であり成立の時代が分らないが女神の出現の理由が日本のものとは全く異っている。神話学に全く素人の私が調べたものできわめて不備であるがこの狭い範囲内での検証から見ると日本における老人と神のかかわりあいには朝鮮に若干似たものはあるが一応独自のものと考えてよいのではあるまいか。

さて神が老人の姿になって現れるという我国独自の神話伝説の意味するものは何であらうか。それを解く鍵は二つあると思われる。第一章にあげた例を検討してみると話の主人公の危難を救うというモチーフを持つものが(1)(2)(3)(9)(12)とあり、(4)(6)の前半(10)(13)もこれに類すると

考えてよい。とくに(1)(2)の神話がこのモチーフを持つことは本来神が老人の姿になって現れるのは主人公の危難を救うことにあったことを示していると思われる。どの民族の神話をとってみても神は変現自在であり種々のものに姿をかえている。古事記だけをみても、三輪の大神が丹塗の矢に化けて勢夜陀良比売に通ずる話、同じく三輪の大神がうるわしい男に化けて活玉依比売に通ずる話、倭建命が足柄で白い鹿に化けた坂の神に会う話、おなじく倭建命が伊吹山で白い猪に化けた伊服岐能山の神に会う話、雄略天皇が葛城山で自分と全く同じ恰好で現れた一言主大神と会う話がある。この五話は説明するまでもなく主人公の危難を救うというモチーフとは無関係でありむしろ倭建命の場合は危害を加えようとするものである。これらを見るとわれわれの遠い祖先は明らかに老人にひとつの役割を与え或は期待していたとみてよいであろう。すなわち老人は個人の（おそらくはその上に社会の）危機を救ってくれる、或は救うべき存在であると認識されていたのである。(2)の例を見てみよう。この場合誰しも考えるのは強力な青壮年が現れることであろう。牛をひねり倒すのに老人は全くふさわしくないのである。にもかかわらず翁が出て来るのである。このように認識された老人とは何者であろうか。これについては後で述べることとする。

二つ目として目につくのは住吉明神の活躍の多いことである。単にみても(2)(5)(7)(9)(11)(12)とあり(1)の塩土の老翁も住吉明神のこととされている。このことはいわば住吉明神の活動譚が元形となって他の神仏に波及したことをあらわすものである。住吉の神とは何者であるか。十分検討する必要がある。

橘覺勝は塩土の老翁について「その正体は純粹の神でもなければ真人間でもない、神と人間とを媒介する精霊であり、シャーマン的人格であったとみることができ、あたかも既述の旧約に出る白髪老人と同じタイプのもののようにおもわれる。話によれば呪術に用いられた道具（呪物）は玄櫛であつた（玄櫛を地に投げつけた途端に数百本の竹が生えた）。櫛が呪物につかわれることは、すでに未開民族のあいだでもひろく行われているところである。……おきな、おうなといえは、なんらかの姿や形で呪術、妖術を心えているスーパーマンとして、畏敬尊崇されたものだと考えてよいのではないかとおもふ」といっている。^(注五)

既述のようにアルタイ系の神話がわが国に入ってきて来ている以上シャーマニズムがわが国にあったことは間違いない。桜井徳太郎は「日本神話がいみじくも示すごとく、神話時代の日本の神々の多くは、天上の高天原に鎮座した（天つ神）。日本民族がこの高天原を天空と見立てていたことも実証済みである。高天原神話がもの語る高天原の至高神は、いうまでもなくアマテラスであつて、これはまさしくアルタイ語族の神観の示す、天空の至高神に比定できる。日本では、ただに神話が示すのみでなく、古社霊社の縁起や祭神出現の草創伝説のなか

に、天空から神が示顯して「あれまし」という幾多の奇蹟をあらわすという伝承が数多く伝えられている。これらのモチーフもまたアルタイモチーフと類似する。^(注六) といつて日本にアルタイ族の影響が強くシャーマニズムの存在することを示唆している。しかしながら通常シャーマンになるのは女子であり記紀を見てもとへば

「其の太后息長おきなが帯日売命たらしひめは、当時婦神そのかみかみりしたまひき。故、天皇筑紫の詞志比宮に坐しまして、熊曾国うたを撃むとしたまひし時に、天皇御琴控ひきたまひて、建内宿禰大臣沙庭に居て神の命を請ひまつりき。是に太后神婦りしたまひて、言教へ覺し詔りたまへるは……」(古事記中巻仲哀天皇の項)

とある。明らかに神功皇后はシャーマンだったと見る事が出来る。後年の伊勢神宮に奉仕する斎宮、賀茂神社に奉仕する斎院いずれもシャーマンであろう。したがって姫はともあれ翁をもって直にシャーマンとするのはあたらなひであらう。シャーマンには本来シャーマンの素質があり若い頃からの修業が大切とされており老人になつたからといつてシャーマンになり得るものではない。むしろ憑霊状態になるということは若い時のほうが容易ではないかと思われる。橘氏の所説の中に出てくる玄櫛による呪術も一書にあるのみで日本書紀の本文および二つある一書、ならびに古事記では記載のないことである。したがって神が老人の姿をして現れるのは老人がシャーマンの人格の持主であつたためとは思われぬ。

古代の日本人は靈魂は「人の生死に拘らず生存して居るものである」^(注七)と考へており、その故に柳田国男は日本人の多数がもとは死後の世界を近く親しく何か其の消息に通じて居るやうな氣持を抱いていたとしてその理由として「第一には死してもこの国の中に、靈は留まつて遠くへは行かぬと思つたこと、第二には顯幽二界の交通が繁く、單に春秋の定期の祭だけで無しに、何れか一方のみの心ざしによつて、招き招かるゝことがさまで困難で無いやうに思つて居たこと……」^(注八)をあげている。そしてさらに正月各戸に訪れる年の神について「家を富ましめ田畠を豊饒にする以上に年を与へることまでが年神の力であつたとすれば、愈々以て此神のもとの地位は明らかである。さういふことまでを或る一つの家門の爲に、世話を焼く神様は他にはあらうとも思はれない。さうして我々が之を白髮の翁姫と想像したことも亦決して不自然ではないかと思ふ。益に平和の家に帰つて来る祖靈を、小児等はやはりぢいさんばあさんと謂つて居た。是は此後に述べようとする靈融合の思想、即ち多くの先祖たちが一体となつて、子孫後裔を助け護らうとして居るといふ信仰を考え合せると、子供に親しみを持たせる爲には、是より好い名は無いのであつた。さうして又我々の氏神様も、もとは屢々同じ老翁の御姿を以て、信ずる人々の幻覺に現れて居られたのである」^(注九)と述べている。まさに一族を守る祖靈さらには氏神が老人の姿をしているではないか。

折口信夫は年の神をとこよから来るまればと（来訪する神）としておりさらにとこよについては海中または海の彼岸にあり、村の祖先以来の魂の皆行き集っている所で、畏怖の念と尊敬の念をもたれていたものとしている。^(注一)さらに氏は「畏怖の念より尊敬の方に傾いて来ると男性・女性の祖先一統を代表する霊の姿が考えられて来る。其が祖先であると言ふ考へから高年の翁嫗に想像せられることが多い。」^(注二)といっている。結局まればとⅡ祖霊となり柳田の考へとはほぼ一致するとみてよいであろう。以上兩氏の考えから我々の祖先が神を想像する際身近かな年の神乃至氏神から翁の姿を思い浮べたことは間違いないであろう。同時に老人の姿の神は祖霊・氏神であるが故に、主人公の幸福を念じており、危難を救うことになるのである。

次に住吉の神であるが、その前に塩土の老翁についてみてみよう。海幸山幸の神話における彼の役割はいうまでもなく現世とわだつみの国との媒介者である。わだつみの国とは海底にある国即ち前記のとこよではないか。おそらく汎世界的な「失われた釣針」のモチーフ中に海底国が出て来るため、われわれの祖先は其処にとこよを認め、現世の者が容易に往来出来る所でないため案内人として塩土の老翁というまればとを配したのではあるまいか。この塩土の老翁は日本書紀の神武巻にも現れるが、鈴木重胤の日本書紀伝では底筒男、中筒男、表筒男三神を一神とした名であるとし、飯田武郷の日本書紀通釈では住吉大神の現人神としている。これらの説をそのまま受取れば塩土の老翁は住吉の神ということになるのであるがそれは恐らく次に述べるようにひとしく海神に属するからであろう。住吉の神は記紀によると伊耶那岐命が筑紫で楔祓をしたときに生れた底筒男、中筒男、表筒男の三神をいひ、神功皇后の新羅征討に偉功をたて後摂津のつもりの浦に祀られた。古来海上守護の神として信仰され、皇室の尊崇もあつく、いつしか和歌の神としても歌人から尊信された。(5)の業平および(9)の後徳大寺左大臣の和歌に感応する話はここから出たものであろう。住吉の神が海の守護人であるから(2)(9)(12)の話が出て来たともみてよいであろう。(9)のみは住吉の神の二つの性格が同時にあらわれている。

以上を要約すると古代日本人は本人或いは一家を祖霊または氏神が守ってくれるという信仰を持ち、かつその祖霊または氏神を具象化すると翁嫗であると思っていたということになる。たまたま伝わって来た海幸山幸の話に対し行先がわだつみの宮すなわちとこよである所からとこよからのまればと塩土の老翁を配したのであろう。(2)の伝説はたまたま神功皇后は新羅征討からの帰路であり、征討に偉功のあった住吉の神を配したとも考えられるし、住吉の神が海上守護の神である所から配されたとも考えられる。以後塩土の老翁も住吉の神であるといわれるようになりその活躍が目立つようになったのであろう。

守護神Ⅱ祖霊・氏神Ⅱ翁嫗の図式が成立すると仏教が入った後は仏が老人の姿であられるようになるのも当然の成行といってよいであ

ろう。私は当初神話の形成期は弥生式時代以降すなわち稲作時代であり、農耕民族にある敬老、優老思想が基礎になって老人と神のかかわりが成立したものと思っていたがこれは全くの見当違いであったことになる。橘氏も亦私同様の錯誤におち入っていた感が深い。私の今回の研究が正しいとすれば起源は敬老・優老思想よりも深い所にある原始日本人の宗教観にもとづくことになる。本稿を終った日先覚橘先生の訃報に接した。謹んで御冥福を祈る。(八月三十一日)

註一 大林太良「日本神話の起源」二三二、二三三頁(角川選書)

註二 大林太良「比較神話学から見た日本神話——海幸山幸を中心として——」講座日本文学上古 一四九頁以下

註三 大林太良「日本神話の起源」二三六頁以下

金思燁訳「三国遺事」、青柳綱太郎編「三国史記」、三品彰英「日鮮神話伝説の研究」、白川静「中国の神話」、貝塚茂樹「中国の神話」、袁珂・伊藤敬一外訳「中国古代神話」、吉田敦彦「ギリシヤ神話と日本神話」、K・ケレーニイ・高橋英夫訳「ギリシヤ神話——神々の時代」、ホーマー・呉茂一訳「イーリアス」、同「オディッセイア」、花岡泰隆「インドネシアの民話」、老子、莊子、列子、

註五 橘寛勝「老いの探究」(誠信書房) 五一頁以下

註六 桜井徳太郎「日本のシャーマニズム(上)」(吉川弘文館) 七五頁

註七 折口信夫「国文学の発生——まればとの意義」折口信夫全集卷一 二五頁

註八 柳田国男「先祖の話」柳田国男全集卷一〇 一二〇頁

註九 右に同じ 卷一〇 四二頁

註一〇 七に同じ 三六頁

註一一 右に同じ 五七頁

註一二 右に同じ 五七頁